



東京の介護って すばらしい グランプリ 2021

コラム部門受賞作品集





最優秀賞



ファンレター

川添桃子（社会福祉法人愛隣会 特別養護老人ホーム駒場苑）

はじめてお便りさせていただきます。
私は、最近あなたのことを知ってファンになったものです。

面と向かって伝えるのは難しいから、手紙を書きました。
それに、あなたも直接言われるのは望まないでしょうから。

あなたのことを知ったのは、ここにきて数日経った頃だったと思います。
同行研修中、ナースコールが鳴ってベッドサイドに向かうと、先輩は私にカーテンの外で待っているように指示しました。
「この人は今ちょっと調子悪いみたいだから、今度また改めてあいさつしようね。ちょっと強い言葉でいろいろ言うけど、悪い人じゃないからあまり気にしないで」と先輩は言いました。一体どんな人なのだろう、どれほど具合が悪いのだろう、ちゃんと話せる日は来るのかな。早く会いたいな。そんな思いで数週間待ち、ようやくお会いできたときはちょっとウルっとしてしまいました。

はじめて入浴のお手伝いをした日。「もっとテキパキやんなさい。わたしは手足が動かないんだから」確かに言葉はパワフルで驚きました。見守りの先輩にまで「あんたもぼさとしてないで！」と檄をとばしていたのはおかしかったけれど、でも、あなたの言葉は厳しくとも的確でした。どうすればスムーズに着替えられるか、痛み少なく身体を洗えるかもちゃんとわかっていて、教えてくださったのですよね。

私もなんとかかしたいのだけど、自分がかかわることであなたを苦しめてしまいそうで、もどかしくて、つい先輩に代わってもらったりもしました。

そんなあるとき。
あなたが再び体調を崩してベッドから離れられなくなったとき。
あなたにトイレ介助を頼まれたのに、なかなかうまくいかなくて結局先輩と二人がかりになってしまって。ようやくベッドに戻ったあなたは息も絶え絶えで全身が痛いと言っていましたね。

やっぱり私はあなたを痛めつけてしまうのかな。
あとから様子を見に来た看護師さんに何か話しているのを見て、あぁきっと嫌がられたなと泣きそうになりました。その日は結局あなたと顔を合わせないまま退勤時間をむかえました。

最後にひととおり記録を確認してから帰ろうとPCを開くと、さっきの看護師さんの記録が目に残りました。トイレ介助のときの出来事を一通り話したあと、あなたはこう言ったそうですね。



「身体が動かないことも、手間かけさせちゃうのも仕方ないと思ってる。私は、人として最期まで生きたいの」

ハッとしました。ままならない身体の内にある、あなたの気高さに触れた気がしました。これからも、どこまでもあなたに付き合いたいと。応援したいと心から思いました。

老人ホームにいる人は、弱いもの。
いつしか、そんな思い込みがあったのかもしれない。

あなたの「強さ」に報いたい。
あの日から、私はあなたのファンになってしまいました。

コップを持つ手を支えること。
そろりと上着を着ること。
時間をかけて、一粒ずつ薬を飲むこと。
ちょっと鋭い言葉にドキリとすること。
そんな些細なことも、あなたの強さに裏打ちされた意志なのだろうと。

あなたがどんなふうにも暮らしていたか、想像するほかありません。
きっと、さっぱりとした厳しさを人にも自分にも向ける、凜とした女性。
時々いたずらっぽく笑う姿に、あなたを慕う人も多かったことでしょう。

最近、私は夜勤にも入るようになりました。
深夜、あなたのベッドからAMラジオの音が漏れ聞こえると、少しさみしさが紛れることに気づきました。

この先、どんなことがあるかはわからないけど。
できれば少しでも長く、あなたのことを応援していきたいと思っています。

それでは。またお手紙を書かせてくださいね。

